

もう一人の *Our Mutual Friend*

— Mortimer Lightwood の考察

熊谷めぐみ

序

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens 1812-1870) の最後の完成長編小説 *Our Mutual Friend* (1864-65) は、そのタイトルが示すように、多種多様なキャラクターたちが互いに関係し、影響し合いながら展開する物語である。また、様々に分断された世界を描く物語でもあり、華やかな社交界の世界から、テムズ川の川さらいを仕事とする下層階級の者たちの世界に至るまで、縦横無尽に横断するこの物語において、世界を分断するのは、階級、性別、年齢、職業などの違いに留まらない (作品の断片化や接合に着目した批評史については松本を参照)。それは、一人の人間の内部にも及んでおり、アイデンティティ確立への壁となって立ちはだかる。また、そのように分断された世界は、切断された自らの足を取り戻そうとする、義足のサイラス・ウェッグ (Silas Wegg) のように、様々なキャラクターによって表象されている。

分断された世界は同時に寄せ集めの世界でもある。社交界に君臨する成金夫婦のヴェニヤリング夫妻 (Mr. and Mrs. Vennering) の家のパーティーには、彼の金の力に魅せられて様々な人物が集うが、彼らはほとんどがみな初対面でありながら、ヴェニヤリングと一番古い友人であるかのようにふるまい、善良

な紳士のトゥエムロウ (Twemlow) を困惑させる。まさに、本質的な繋がりを欠いた寄せ集めの社会の縮図となっている。また、分断と寄せ集めは、ウェッジの切断された足を商品として扱い、他の人間から切断された体の部位から一人の人間を組み立てて作り直そうとする剥製師で人骨接合師のヴィーナス (Venus) にも、象徴的に表されている。

このように、分断され、寄せ集められた偽りの接合が行われる世界においては、真の結びつきが重要視されており、タイトルである “Our Mutual Friend” 「互いの友」という語は、単なる、「共通の友人」という意味に留まらない、この分断された世界を繋ぐ象徴的な役割が付与されていると考えられる。タイトルに関して、ディケンズの友人であり、その伝記作家でもあるジョン・フォースター (John Forster) は、“Four years earlier he had chosen this title as a good one, and he held to it through much objection.” (740) と、記しており、多くの反対意見があったにも関わらず、ディケンズがこのタイトルに固執したことが伺える。“mutual” という語の用法については、G. K. Chesterton はその用法の誤りを “uneducated Dickens” (207) の現れだとし、“Any priggish pupil teacher could tell Dickens that there is no such phrase in English as ‘our mutual friend’” (207) と批判する。しかし、植木研介が指摘するように、ディケンズは同作品中、「間接話法の形で ‘their [our] common friend Fledgeby’」として「正しい用法を使っている」(287) のであり、用法を誤ったわけではない。また、作中で ‘mutual’ は単に ‘common’ の意ばかりではなく ‘reciprocal’ の響きを帯びてくる」ものもあり、「*Our Mutual Friend* というタイトルが ‘friend’ の語が意味を失っていない世界の存在を示している」(296) としている。ディケンズは、ただ単に語の用法を誤ったわけではなく、このタイトルに作品における特別な意味を付与していたと考えられる。

本論では、以上のように *Our Mutual Friend* が、単に “Our Common Friend” ではなく、“Our Mutual Friend” でなくてはならなかったことをふまえ、作品における「互いの友」の意義の重要性を考えた上で、作中「互いの友」として示される主人公ジョン・ハーモン (John Harmon) ではなく、作品上に浮上する「もう一人の “Our Mutual Friend”」としてのモーティマー・ライトウッド (Mortimer Lightwood) の重要性に注目する。タイトルに示された重要な役割を影のように果たすモーティマーの、物語に果たす真の役割を考察していく。

1. 浮上する「もう一人の」互いの友

作品のプロットは大きく二つに分かれており、莫大な遺産相続の権利を有しながらも、金銭の力に支配されることを恐れ、秘書の姿を借りて生活するジョン・ロクスミス (John Roksmith) ことジョン・ハーモンと、無気力でうだつが上がらない法廷弁護士ユージーン・レイバーン (Eugene Wrayburn) が、それぞれに再生を果して生まれ変わり、ジョンは婚約者のベラ・ウィルファー (Bella Wilfer) と、ユージーンは労働者階級の娘リジー・ヘクスサム (Lizzie Hexam) と結ばれ大団円を迎えるというものである。その二つのプロットを大まかな主軸としながらも、多様なキャラクターたちはそれぞれが各々のストーリーを展開し、また、互いに重要な影響を与え合うことで、非常に入り組んだ複雑な物語を繰り広げる。人々の関わり合いが重要となるこの作品において、タイトルである“*Our Mutual Friend*”という言葉は疑いなく重要な意味を内包している。

“*Our Mutual Friend*”「互いの友」という言葉は、作中においては、溺死したと思われるジョンの代わりに遺産を受け継ぐことになった、善良で素朴な元使用人の老人ボフィン (Boffin) が、ジョンを指して“*I may call him Our Mutual Friend*” (115) と使用する言葉として登場する。ジョンは、この時、本名のジョン・ハーモンではなく、ウィルファー家の謎の間借り人、ジョン・ロクスミスと名乗っており、この時点で、彼の正体は誰にも明かされていない。また、この「互いの友」はボフィンにとっても、ウィルファー家の人間にとっても、この時点では単なる「共通の知人」に過ぎず、その本来の意味は発揮されていない。しかし、“*living-dead man*” (367) として生きることを決意し、ボフィンの秘書となったジョンは、密かにボフィン夫妻にその正体を打ち明け、彼らと協力して金銭の魅力に囚われた婚約者ベラの心を愛情で掴み、強欲な守銭奴であった父への服従から逃れ、ジョン・ハーモンとなって遺産を受け継ぐことで、“*mutual friendship*”の存在する世界の、愛、献身、償いを体現する人物”(植木 296) へと姿を変え、「互いの友」としての役割を果たすことになる。

このように、ハーモン、ロクスミス、そしてジュリアス・ハンスフォード (Julius Handford) という名を使い分けて、様々な人々と接触するジョンは、物語の主人公として確かに作中で人々を結ぶ「互いの友」の役割を果たしている。しかし、物語全体を通して人々を結びつける「互いの友」の役割を真に果たしていると言えるのは、ジョン・ハーモンではなく、ユージーンの子供である

り、事務弁護士のモーティマー・ライトウッドであると考えられるのではないだろうか。

モーティマーは作品の主人公の一人であるユージーン・レイバーンのパブリック・スクール時代からの親友として物語に登場する人物である。そのため、主にユージーンが中心になるプロットにおいて登場することになるのだが、事務弁護士という職業が、モーティマーをジョンのプロット側にも深く立ち入らせることになる。彼はユージーン同様に怠惰で無気力な生活を送っており、ティピンズ夫人 (Lady Tippins) の遺書を書きかえる以外は、仕事らしい仕事をするともなく、無為に日々を過ごしている。しかし、ふとした偶然から、ボフィンに弁護士として雇われ、ハーモンの遺産相続の手続きを依頼されることになり、今は行方不明となった相続人、ジョン・ハーモンの搜索を任される。そして、モーティマーの連絡を受けたジョンは、海外からイギリスに戻ってくることになる。ここでは、弁護士という職業を通じて、モーティマーが地理的に分断されていたジョンを、イギリスへと再び結び合わせる重要な役割を果たしていると言える。また、ボフィン夫妻が、未婚のまま世間的には未亡人ようになってしまったベラの後見人となることから、ウィルファー家とも関わりを持つようになる。さらに、水死体で発見されたジョンの遺体を確認するために、川さらいで生計を立てる下層労働者階級のジェシー・ヘクサム (Jesse Hexam) と出会うことになり、共に付いてきたユージーンがその娘リジーを見初めるという重要な展開を引き起こすきっかけを作ることになる。このように、二つの主要な物語を横断し、異なる階級や職業、性別の人々を結びつけるのは、その元となる原因はジョン・ハーモンの遺産相続に絡む問題であっても、実際にその糸を繋ぐ役割を果たしているのはモーティマーなのである。

モーティマーはユージーンが後に思いを寄せることになる、身分違いの労働者階級の娘リジー・ヘクサムの弟、チャーリー・ヘクサム (Charley Hexam) に次のように言われる。

‘And Mr Lightwood,’ added the boy, with a burning face, under the flaming aggravation of getting no sort of answer or attention, ‘I hope you’ll take notice of what I have said to your friend, and of what your friend has heard me say, word by word, whatever he pretends to the contrary. You are bound to take notice of it, Mr Lightwood, for, as I have already mentioned, you first brought your friend into my sister’s company, and but for you we never

should have seen him. Lord knows none of us ever wanted him, any more than any of us will ever miss him.' (289)

この場面でチャーリーが繰り返し糾弾するように、「モーティマーさえいなければ」ユージーンとリジーは出会うことがなかったのであり、それは他の登場人物を繋ぐモーティマーの役割に対しても言えることである。このチャーリーの台詞からは、登場人物たちを繋ぐ「互いの友」としての役割を作者が意識的にモーティマーに負わせていることが伺える。

では、モーティマーがもう一人の「互いの友」としての役割を果たしているとするれば、なぜディケンズは彼にその役割を付与したのであろうか。

2. 沈黙するモーティマー

モーティマー・ライトウッドは作中で、多くのキャラクターと関係しながらも、彼自身の物語がほとんど語られることのない人物である。端役も含めて、ほとんどすべての人物に各々のストーリーが用意されている中で、主役級ではないものの、物語の中心に絡んでくることの多いモーティマー自身の物語は、注意深く排除され、沈黙している。この沈黙性において、モーティマーは特異なキャラクターであると考えられる。モーティマーの生い立ちや家庭環境は、ユージーンのそれが描かれるときに付属物のようにしてそっと描かれるに過ぎない。四男に生まれたユージーンは、一家に一人は法廷弁護士 (barrister) が必要だという理由で、父親にその職業を押し付けられるが、モーティマーもまた、“It was forced upon me,” said Mortimer, “because it was understood that we wanted a solicitor in the family. And we have got a precious one.” (29) と、ユージーンと同じ理由で事務弁護士という職業を押し付けられることになった経緯が語られ、同じようなアッパー・ミドルクラスの次男以下の子息として生まれ育ったことが推察される。モーティマーはまるでユージーンに影のように寄り添い、共に“energy”を呼び起こす何かを求めて鬱々とした日々を送っている。しかし、ユージーンが父親からもたらされた結婚話に悩むのに対し、モーティマーはまるで自分の身には起こりえないことであるかのような様子を見せる。ここに、モーティマーというキャラクターの特異性が顕著な形で現れているように思われる。

モーティマーの抱える葛藤や悩みなどは、同じような悩みを抱えるユージー

ンの方に重きが置かれるために、その影が薄くなる、または一切描かれることがない。彼はあくまでもそれぞれのキャラクターの物語の見届け人なのであって、彼が主役の物語は慎重に避けられている、と考えられる。しかし、その中でもその沈黙性が目立つのは、結婚や恋愛においてである。彼には物語中のほとんどあらゆるキャラクターに言及されているとさえ言える、結婚や恋愛の要素がごっそりと排除されている。

ハッピー・エンディングを迎える二組のカップルや、ボフィン夫妻、ウィルファー夫妻、ヴェニヤリング夫妻、ラムル (Lammle) 夫妻といった夫婦関係のみならず、作中では独身男女の恋愛要素も多く描かれる。チャーリーの通う学校の教師ブラッドリー・ヘッドストーン (Bradley Headstone) は彼の身を減らすことになる程の想いをリジーに寄せ、またそんなヘッドストーンには女性教師のピーチャー (Peecher) が想いを寄せている。ヴィーナスはライダーフッド (Riderhood) の娘プレザント (Pleasant) への恋に悩み、人形の洋服仕立屋で障害を持つ少女ジェニー・レン (Jenny Wren) ことファニー・クリーヴァー (Fanny Cleaver) には、物語終盤でスロッピー (Sloppy) との恋がほのめかされる。狡猾な金貸し屋のフレジビー (Fledgeby) でさえも、策略とはいえ、ポズナップ (Podsnap) の娘ジョージアナ (Georgiana) との偽りの恋愛模様が描かれる。このように、老若男女問わず、また役の大小を問わず、結婚や恋愛の要素は作中に満ちている。それにもかかわらず、似たような境遇のユージーンに起きたような結婚話が持ち上がることもなく、また適齢期といえるであろう年齢のモーティマーに、恋愛要素が一切付与されないことから、意図的にそれらの要素が取り除かれていると考えることができる。

唯一、モーティマーの恋愛要素が指摘されるのは、ジョン・ハーモンの婚約者ベラ・ウィルファーに思いを寄せているらしいという記述だが、それもベラ本人がそう思い込んでいるだけであって、真相は定かではない。また、モーティマー自身の行動や言動にはそのようなそぶりは見られず、この件はそれ以上作中で触れられることはない。ユージーンの結婚話を他人事のように聞くモーティマーは、大人になれない少年というよりも、どこか老成した人物のような達観した様子を感じさせる。壮年の独身紳士トゥエムローが、年を重ねても共に生きる女性を求めて嘆く様子とは対照的であり、まるでモーティマーの人生に結婚や恋愛というものが存在しないかのように描かれる。

沈黙する恋愛要素を穴埋めするように描かれるのは、親友ユージーンへの献身的な友情である。二人は互いに寄り添っているものの、ユージーンがモーティ

マーのよき理解者である以上に、モーティマーがユージーンのよき理解者であろうとする様子は作中何度も描かれ、二人の強固な結びつきが強調される。その意味で、作中モーティマーが積極的に関心を持つ相手はユージーンただ一人に限定されていると言っても過言ではない。結婚や恋愛の様子が排除されていることによって、さらに彼らの絆は際立って現れる。

Despite that pernicious assumption of lassitude and indifference, which had become his second nature, he was strongly attached to his friend. He had founded himself upon Eugene when they were yet boys at school: and at this hour imitated him no less, admired him no less, loved him no less, than in those departed days. (282)

ユージーンをまねて、敬愛し、愛し生きてきた、と語られるモーティマーは、彼の献身的なダブルとして、常にそばに寄り添ってきたことがわかる。彼らは、パブリック・スクール時代からの強い絆で結ばれており、生活を共にしている。

二人は長い夏季休暇の間、共に過ごすために共同生活を始めるが、二人が新生活を始めた住居に、ユージーンは必要のない台所用品を揃える。使われるはずのない器具を見ながら文句を言うモーティマーに対し、ユージーンはそれが「家庭的徳性」(the domestic virtues, 281)であると茶化して反論する。さらにユージーンは、“by means of the moral influences with which I have surrounded you, to encourage the formation of the domestic virtues.” (282) とふざける。ヴィクトリア朝における、男性は外、女性は家庭と分けられた二項対立的な区分に従えば、家庭というのは女性を連想する空間であり、また、道徳的な影響力も女性が持つものとされていた。男性二人の暮らしに「道徳的影響力」によって「家庭的特性」を持ち込むと言うユージーンは、ことごとくそれらの概念とは折り合わない彼ら自身の生活を笑い飛ばす一方で、「家庭」が象徴する家父長制中産階級の求める規範をも笑い飛ばしている。しかし、ここで重要なのは、このことが、二項対立的に区分されたはずのジェンダーの役割を曖昧なものにしている点であり、ユージーン、そしてモーティマーの性的な役割の両義性が示唆されている点にある。

イヴ・セジウィック (Sedgwick, Eve) は *Our Mutual Friend* が、“the very excess, the supervisibility of the homosocial / homophobic / homosexual thematics” (165) を持つ作品であると指摘しているが、モーティマーのユージー

ンにのみ作者によって表出の許された愛情を考えてみる時、そこには強いホモソーシャルな絆を持つという以上の、ホモエロティックな感情が見出されるのではないだろうか。自身の物語には沈黙を保つキャラクターであるからこそ、その限定された感情の表出の機会には、単なる友情以上の意味を付与されているように思われるのである。その感情の発露は物語終盤で、ユージーンが恋敵のヘッドストーンに襲われ瀕死の重傷を負った際に解き放たれ、初めて沈黙を破ることになる。

3. 逸脱者モーティマー

モーティマーが、初めて感情を露わにするのは、ユージーンの命が危機にさらされたときである。死の淵を彷徨い続け、昏睡状態のユージーンは、看病するモーティマーやリジーに、人形の洋服仕立屋ジェニーを呼んでほしいとうわ言で何度も口にする。死を予感したユージーンは、想像の天使を見ることができ、ジェニーに傍にいてほしいと願うのだが、ユージーンの望みで、ジェニーを呼びに彼女を訪ねたモーティマーは、初対面の少女の前で、“If you delay, he may die with his request ungratified, with his last wish – intrusted to me – we have long been much more than brothers – unfulfilled. I shall break down, if I try to say more.” (717) と憔悴した様子を隠すことができない。また、意識の混濁するユージーンの伝えようとする言葉を聞き逃すまいと、普段は言葉にすることのない本心を口にしてしまうのである。

‘You wanted to tell me something, Eugene. My poor dear fellow, you wanted to say something to your old friend – to the friend who has always loved you, admired you, imitated you, founded himself upon you, been nothing without you, and who, God knows, would be here in your place if he could!’ (719)

できるものなら身代わりになりたいと願うモーティマーの想いが、確かに「兄弟以上」の絆を感じさせるものとなるのは、これまで彼の感情がほとんど描かれることがなかったためである。

ホリー・フルノー (Holly Furneaux) は、ディケンズの作品に登場する同性同士の看病の場面に着目している：“Dickens’s narratives of same-sex nursing draw attention to the complex inter-relationships between healing,

touch, and eroticism” (200)。その上で、“Nursing is certainly a key note in the ‘erotic repertoire’ of Victorian culture, and its sexual resonances are in no way diminished when nurse and patient are of the same-sex” (205) と、ヴィクトリア朝において看病が、同性同士の間でエロティックなものを喚起する行為であったことを指摘している。フルノーは取り上げていないが、このロジックは当然、*Our Mutual Friend* における、モーティマーのユージーンを看病する場面にも有効である。したがって、瀕死の重傷を負ったユージーンのベッドを囲むのは“the medical attendant”と“Lizzie, who was there in all her intervals of rest”と“Lightwood, who never left him” (717) であり、ユージーンのそばを離れずに看病していたのは妻となるリジーではなくモーティマーであったことには、重要な意味がある。リジーはこの時、仕事のためにユージーンのもとを離れているのであって、家庭は女性のもととされた、ヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギーが再びこの二人の下で、転覆している様子も見逃せない。

さらに、リジーを呼びに行くモーティマーに対するユージーンの言葉は意味深長である。

‘No. Touch my face with yours, in case I should not hold out till you come back. I love you, Mortimer. Don’t be uneasy for me while you are gone. If my dear brave girl will take me, I feel persuaded that I shall live long enough to be married, dear fellow.’ (723)

ここでは、看病と身体的に触れ合うことが同一の意味であるということが意図的に喚起され、性的なイメージがはっきりと浮かび上がる。さらに、リジーへの愛を語りながら、モーティマーに「愛してる」と告げることにより、ユージーンの双方への愛が戦略的に重ね合わされていることに留意しなくてはならない。リジーに対するプロポーズの場面が省略されて、代わりに務めるかのようにこの場面が挿入されているのもまた、示唆的である。二人の間に描かれるホモエロティックな感情はこれ以上の発展を見せることはなく、モーティマーには最後まで恋愛要素が欠けたまま、二組の夫婦の幸福を見届ける役目を果たすことになる。しかし、ユージーンがリジーと結婚し、一家の長としての立場を着々と築いていくことの陰画として、モーティマーとユージーンとの関係の発展を見ることはできるだろう。このユージーンにのみ限定された強い愛情の発露や、看病の場面に見られる二人の間を漂う性的な色合いを見つめるとき、

そこには異性愛には収まりきらない規範から距離を取ったモーティマーのセクシュアリティがはっきりと浮かび上がるのではないだろうか。

4. 抑圧への葛藤

ユージーンを軸として考えたとき、モーティマーと対称的な位置を占めることになるのは、リジーだけではない。ユージーンに強く執着するヘッドストーンもまた、モーティマーと対称的な位置にあり、ある種のダブルの関係にあるということができる。

こう考えたとき、モーティマーの中にユージーンを愛することへの葛藤が見られない点は、むしろ重要な意味を持つてくる。規範と同性愛という性的逸脱の間で揺れ動く様子や、リジーと結婚するユージーンに対して、葛藤する様子は見られない。モーティマーの中には物語の様々なことに表象される分断の要素が付与されていない。自我の揺れを見せないモーティマーに対して、物語中で自我の葛藤をもっとも露わにするのが、ブラッドリー・ヘッドストーンである。様々な名前を使い分けて役を演じ、自らアイデンティティを葬ろうとするジョン・ハーモン同等に、あるいはより顕著な、そして切迫した形で表象されるのが、ヘッドストーンにおける二つの自我の分裂である。ヘッドストーンは、下層階級から努力と勤勉によって学校の校長という社会的地位を手に入れた、サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の主張する時代の支配的イデオロギーを代表するような、立身出世の美德を体現する人物である。しかしアンガス・ウィルソン (Angus Wilson) が、1854 年出版の *Hard Times* 以降、ディケンズの作品には、“rejection of the virtues of self-help, of the heroism of the man who by hard work and self-denial” (235) が見られると指摘するように、ヘッドストーンもまた成功した人物の理想像と描かれることはなく、彼自身の激しい気質と折り合いをつけることができずに、身の破滅を招く人物として描かれる。彼のぎこちなさはその衣服にすでに表れている。

Bradley Headstone, in his decent black coat and waistcoat, and decent white shirt, and decent formal black tie, and decent pantaloons of pepper and salt, with his decent silver watch in his pocket and its decent hair-guard round his neck, looked a thoroughly decent young man of six-and-twenty. He was never seen in any other dress, and yet there were a want of adaptation

between him and it, recalling some mechanics in their holiday clothes. (218)

身を立てるために、ヘッドストーンは自分を抑圧しながら生活してきた。そのため、彼にはどこか歪みが生じ、ただの嫉妬深い男以上の不気味な深みを持って描かれることになる。立派な教師の恰好がちぐはぐな印象を見せるヘッドストーンが、ライダーフードにユージーン殺害の罪を着せようと目論見、水門番の彼の恰好を真似た時に、初めて彼らしく見えるというのは二重の意味で皮肉である。

Truly, Bradley Headstone had taken careful none of the honest man's dress in the course of that night-walk they had had together. He must have committed it to memory, and slowly got it by heart. It was exactly reproduced in the dress he now wore. And whereas, in his own schoolmaster clothes, he usually looked as if they were the clothes of some other man, he now looked, in the clothes of some other man or men, as if they were his own. (619)

ヘッドストーンにとって致命的なのは、ひた隠しにしてきた下層階級の生まれであることが、最下層の労働者であるライダーフードの恰好をしたときに、その恰好に馴染んでしまうことで露呈することである。また抑制され続けた激情はリジーへの愛に燃えあがることで放出される。

It seemed to him as if all that he could suppress in himself he had suppressed, as if all that he could restrain in himself he had restrained, and the time had come – in a rush, in a moment – when the power of self-command had departed from him. (336)

その炎は、一度吹き出せば憎む相手のみならず、自身の身をも滅ぼす炎である。そして、それはリジーに向けたもの以上に、恋敵となるユージーンへと向けられることになる。ヘッドストーンは、リジー以上にユージーンに執着し、夜中彼を付け回す。昼間はリスペクtableな教師の仮面をかぶり、夜は激情のままにユージーンを追いかける様子は、分裂された彼の自我が、二重生活となって現れていることを示している。ヘッドストーンがユージーンに執着する理由は、

恋敵である以上に、ユージーンが彼の階級のコンプレックスを刺激する存在であるためだが、過剰なまでの抑圧にさらされた激情が、ユージーン殺害に向けて放出される様子は、彼の二重生活の描写と相まって、ユージーンへのホモエロティックな感情を強く想起させるものとなる。ヘッドストーンのユージーンへの思いはほとんど思慕にも似た強い執着と憎しみであり、ユージーンの愛情の成就がリジーとの関係としてのみテキスト上で可視化されるように、ここでは、モーティマーに付与されることのなかった性的逸脱への抑圧された葛藤が、ヘッドストーンに代わりに表象されていると考えることができる。ユージーンとリジーをめぐる三角関係がモーティマーの場合には何の障害にもならない穏やかなものとして描かれるのとは対照的に、ヘッドストーンの場合には、彼をユージーン殺害へと駆り立て、自らの破滅へ追いやるものとして描かれる。このことから、共にユージーンに強く執着するモーティマーとヘッドストーンもまた、ある種のダブルの関係であり、ディケンズは、彼らの中に、ホモエロティックな感情を二分して表象しているのだと推測できるのではないだろうか。

結論

モーティマーは、作中でもう一人の「互いの友」としての活躍し、間接的にジョンとベラを、そして直接的にはユージーンとリジーを結びつけるキューピッドとしての役割を果たす。それぞれの立場を見守り、彼自信の物語は奇妙に守られ沈黙しているものの、ユージーンとの絆に兄弟以上のホモエロティックな情熱が存在しているのは、ユージーンの看病の場面や、愛を告白し合う場面から伺うことができる。しかし、ユージーンはヴィクトリア朝の結婚という規範に収まり、モーティマーの想いは再び沈黙することになる。結局モーティマーは、自らは性的逸脱を有しながらも、ユージーンを家父長制と結婚という規範に従属させ、リジーから本来の自由を奪い妻という役割に押し込める役割の一端を担っているとも考えられる。それでは、性的逸脱者であるモーティマーさえも、規範の追従者となって描かれているのだろうか。しかし、そうであるならば、モーティマーの恋愛要素をここまで排除し、同性愛的な感情の発露を強調する必要はなく、ユージーンと同じように結婚相手を見つけて、規範に集約される人物となってもいいはずである。しかし、作者はモーティマーには独自の道を歩ませる。一方、モーティマーが有するであろう抑圧ゆえの葛藤は、同じくユージーンに執着するヘッドストーンに強烈なまでに描かれている。田中孝信は、

晩年のディケンズの保守性を指摘し、ヘッドストーンを「下層階級の潜め持つ本質的な不適合性」を持つゆえに「異質性が露呈した場合には容赦なく排除される」(318)人物であるとするが、ヘッドストーンの内包する異質性とは階級的なものに止まらず、モーティマーにおいては不自然なまでに沈黙している同性愛の要素と言えるのではないだろうか。ヘッドストーンが最終的に社会から排除される結末を見れば、確かにそれは、逸脱者を排除する、規範に忠実な社会への秩序の回復と受け取ることができる。しかし、同じように同性愛的要素を秘めたモーティマーは、沈黙することで、最終章に見られるように、穏やかに彼独自の道を歩むことが許されているのであり、そこにはモーティマーを逸脱者として排除することができず、ヘッドストーンにモーティマーの抑圧を投影することで沈黙の語りの下に彼を守るという、ディケンズの規範に対する曖昧な態度が見え隠れしているように思われる。

最終章の一つ前の章において、それぞれの人物たちのストーリーは結末を迎えているのであり、それを見届けたモーティマーは社交界で、身分の異なる結婚をしたユージン夫妻への嘲笑や非難を聞くことになる。しかし、最後に普段は気の弱い独身紳士トゥエムローが二人に肯定的な意見を言うことで、ジェントルマンの定義が定められ、モーティマーはトゥエムローを家まで送り届け、軽やかに家路に急ぐ、というのが物語の結末である。ここで、物語の終わりに登場するモーティマーとトゥエムローの二人が、共に独身男性であることに注目したい。二人の階級や職業を考えれば、彼らは決して規範から外れた周縁にいる人物とは言えないが、結婚という枠に囚われていないという点では彼らは規範からの逸脱者である。エレイン・ショウォールター (Showalter, Elaine) は、ヴィクトリア朝において結婚しない女性が問題視されたのに対し、“Many Victorian men married late or never, lived a bachelor existence, and spent their adult lives with only male friendships. The odd man, however, was not seen as a problem.”(25) と指摘する。しかし、ディケンズは、ふさわしい結婚相手を父親に押し付けられ悩むユージンの姿に、個人のレベルにおいて中流階級の男性が感じる結婚へのプレッシャーを確かに描き込んでいるのであり、女性よりは厳しいものでなかったとはいえ、はっきりと葛藤は存在したことが伺える。そして、直前の章までで、他のキャラクターたちの物語の結末が出ているのに対して、二人のストーリーはまるでここから始まるかのような開放感を帯びているのも印象的である。

物語は二組のカップルの結婚、そしてジョンとユージンがそれぞれ父親に

与えられた財産や職業を継ぐことで、また、ヘッドストーンのような異質な存在を排除することで、秩序を回復し、規範に集約された世界が理想の世界として提示されているように思われる。しかし、彼らを繋ぐ役割を果たす影の「互いの友」であるモーティマーは、その沈黙の内に性的逸脱性を内包させており、そこにこの物語の逸脱性が浮上するのである。クリス・ルティート (Chris Louttit) が、リジーとの結婚をきっかけに心を入れ替えたユージーンを、“The less likable side of him emerges, when he does become energetic” (128) と評するように、自堕落で社会のはみ出し者でありながらも、“a strong attractive power over the other characters” (Coste 110) を持ち続けた気まぐれで軽薄なユージーンの魅力は、結婚を通じて彼が“energy”を見つけることで明らかに損なわれる。幸福な結末を迎えながらも規範から逃れることのできなかったユージーンが、規範に集約されたことで怠惰な日々に見せていた魅力を半減させたのとは対照的に、結末で一人軽やかに歩き出すモーティマーの姿は規範からの解放を望むディケンズの願いのようにも受け取れるのではないだろうか。

そのように考えた時、作品における「もう一人の Our Mutual Friend」としてのモーティマーの重要性が浮かび上がってくるのである。

Works Cited

- Chesterton, G. K. *Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens*. London: J. M. Dent & Sons, 1911. Print.
- Coste, Marie-Amélie. “Eugene Wrayburn, or The Unbearable Lightness of Being in Dickens.” *The Dickensian* 105.478 (Summer 2009): 109-21. Print.
- Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. 1864-65. Ed. Adrian Poole. London: Penguin, 1997. Print.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. London: Cecil Palmer, 1928. Print.
- Furneaux, Holly. *Queer Dickens: Erotics, Families, Masculinities*. Oxford UP, 2009. Print.
- Louttit, Chris. *Dickens’s Secular Gospel: Work, Gender, and Personality*. New York: Routledge, 2009. Print.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985. Print.
- Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle*. Lon-

don: Virago Press, 1992. Print.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Secker and Warburg, 1970. Print.

植木研介. 『チャールズ・ディケンズ研究—ジャーナリストとして, 小説家として』. 東京: 南雲堂フェニックス, 2004.

田中孝信. 『ディケンズのジェンダー観の変遷—中心と周縁とのせめぎ合い』. 東京: 音羽書房鶴見書店, 2006.

松本靖彦. 「互いの友」. 『ディケンズ鑑賞大事典』. 西條隆雄・植木研介・原英一・佐々木徹・松岡光治編, 東京: 南雲堂, 2007, 353-72.

The Other “Mutual Friend”:
A Consideration of Mortimer Lightwood

Megumi Kumagai

In Dickens’s last completed novel, *Our Mutual Friend* (1864-65), there are two characters which connect other characters as a “Mutual Friend.” One is clearly John Harmon, but another is Mortimer Lightwood who secretly plays an active part in connecting characters. This paper examines how Mortimer performs his true role. I discuss Mortimer’s secret role as “The Other Our Mutual Friend” and Dickens’s attitude to the mores of society.

First, I confirm the role of Mortimer as the other “Mutual Friend,” and examine how he performs the role. He can be defined as the other “Mutual Friend,” for Dickens suggests that sometimes.

Second, I discuss Mortimer’s silence about his love and his story. In the novel, almost all characters are depicted in relation to love, even the minor characters. However, Mortimer’s attention is limited to his affection for Eugene. Mortimer lives as if he were Eugene’s double, and it is a devoted double which guides Eugene’s happy marriage.

Third, I discuss the homoerotic element in Mortimer and Eugene’s relationship. Mortimer’s silence breaks when Eugene’s life is in danger because of Headstone’s serious attack on him. Besides, by considering their nursing scene, we can find

a homoerotic element. In these descriptions, Mortimer's side as a secret sexual outsider emerges.

Finally, I consider Headstone as Mortimer's other double in order to demonstrate that Headstone's excessive suppression expresses his homoerotic desire for Eugene and that it reflects Mortimer's silent desire.

Considering Mortimer's shadowy role as "The Other Our Mutual Friend," another side of this novel is made clear. Although the world depicted in the story seems to support the social order and to exclude outsiders, the character of Mortimer suggests the possibility of Dickens's ambiguous attitude to the mores of the time.